

韓国青銅器時代の農耕技術の多様性と日本弥生時代農耕技術

大庭重信

韓半島では先史時代以来農耕に占める水田稲作の割合が低く、逆に日本列島では高いという違いがあり、これは気候・降水量・地形といった自然環境の違いによるところが大きいことが指摘されている（後藤 2004）。本発表では、自然環境の違いに呼応した日韓両地域の先史時代の農耕空間や農耕技術の多様性について、生態学の視点を援用しつつ考えてみたい。

生態学の分野では、半自然地としての「農地」とそれ以外の「自然地」、そして「人間」との関係史の背景を明らかにするために、人間社会から発せられる因果の背景となる要因（駆動要因）として「人口」「技術」「制度」という3つを重視する（図1、宮下・西廣 2019）。

西日本の弥生時代水田 韓半島よりも温暖多雨、かつ地形勾配が急で沖積平野が発達する日本列島では、弥生時代の多くの水田は、扇状地や谷底低地、沖積低地の自然堤防後背低地に立地し、丘陵から発する小規模な流水や降雨時にのみ水が流れる排水流路を利用した河川灌漑が主体である。発表者は弥生時代の水田構成をⅠ～Ⅲ類に分類し、Ⅰ類は弥生時代の前期、Ⅱ類は中期、Ⅲ類は後期に採用され、弥生時代を通じて水田構成が複雑化し、規模が拡大していくことを示した（図2、大庭 2022）。この変化の駆動要因としては、人口増加による耕地拡大の必要性、複数の水田域（水田ブロック）に水を送る幹線水路の採用や農具の改良といった技術的要因が挙げられるが、条件の良い場所を選択的に利用したであろう弥生時代の耕地拡大の背景には、その灌漑システムを維持するための集団の労働編成や水田稲作に比重を置く生業戦略といった社会的要因が大きかったと考えられ、これは上記の「制度」に置き換えることができよう。

弥生時代の水田構成のなかで最も単純な水田構成はⅠa類とした一つの水田域（水田ブロック）に一本の水路（単線水路）で水を送るもので、近畿地方では弥生時代前期の最も古い段階の水田に採用されており、次いで登場したⅠb類水田はこれに幹線水路を組み合わせたもので、これにより水田域は拡大する（図3）。ただし、単純かつ小規模な水田経営から一律規模拡大を志向するのではなく、その逆もあった。福岡県小郡市の三国丘陵の三沢遺跡群では弥生時代前期前半に規模の大きい井堰を構築して沖積低地の水田開発を志向するものの、その後前期中葉から中期初頭にかけて丘陵側に小規模な集落が分散し、隣接した谷での小規模な水田稲作と畠作を行うとともに、石器組成から狩猟・採集の比重も高い網羅的な生業形態が選択されたと考えられる（図4）。

韓半島南部の穀物資料と青銅器時代水田 韓半島南部は南海岸が西日本と同じ照葉樹林帯に属するのに対し、以北は落葉広葉樹林帯に属し、南北で気候が異なる。また、山脈が東側に偏る韓半島では、大部分の平野は西海岸および南海岸に分布し、内陸部では河川の中上流域に盆地が開けている。平野と盆地は浸食平野が主体で、堆積地形は河床勾配が緩く山地間の谷底低地を流れる河川沿いに主に形成されている（金 1991）。

近年の韓国先史時代の遺跡出土栽培作物や土器圧痕分析資料集成を整理した研究によると（長友 2022）、新石器時代には南部（慶尚道）でアワが北部（京畿道）でキビが多く、青銅器時代にもこの傾向が引き継がれるとともに新たにイネが加わり、江原道を例外に南部ほど、また西部ほどイネの比率が高いという地域差がみられる（図5・6）。こうした傾向は1452年に編纂された『世宗実録』地理誌の記録とも共通しており（後藤 2004）、栽培作物の種類が自然環境にいかに関係していたかがわか

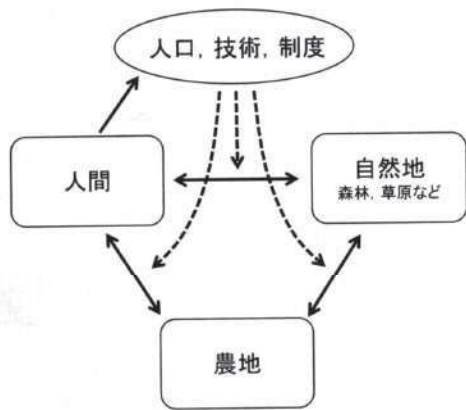
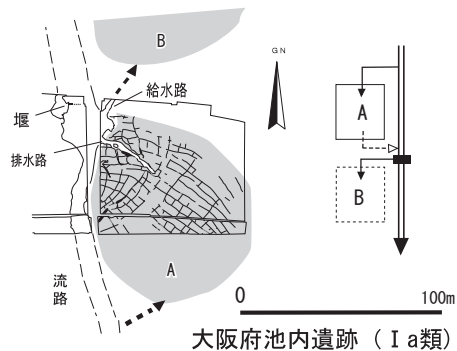
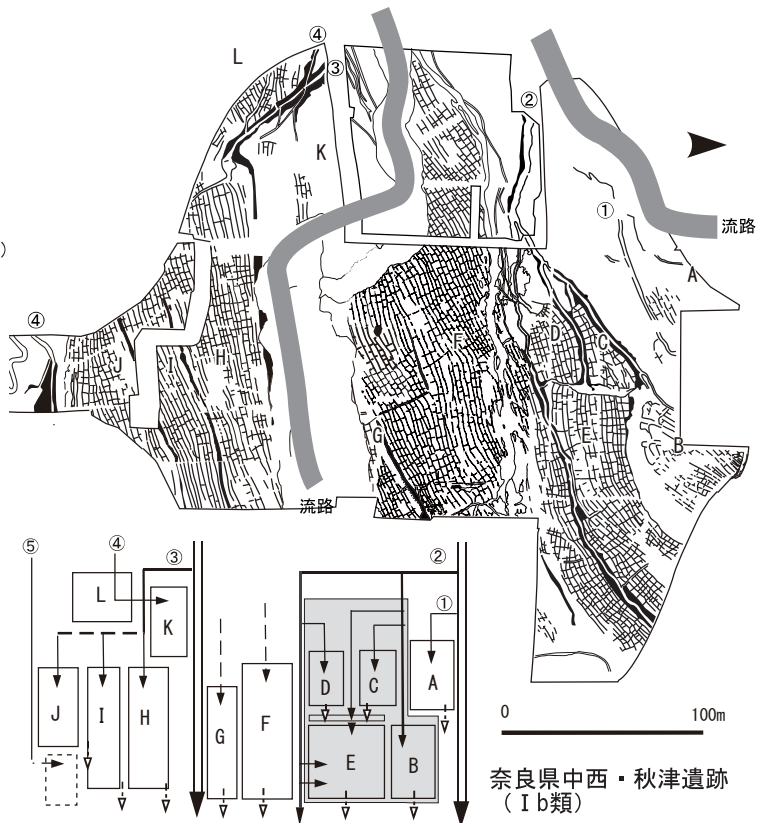


図1 人と自然の関係を解き明かすために必要な因果関係。
人間、農地、自然地の3要素の関係性は、人間社会から発する3つの駆動要因から影響を受けて変化する。ここでは、長期の気候変動から受ける外部要因は省いている。(宮下・西廣 2019)



大阪府池内遺跡 (I a類)



奈良県中西・秋津遺跡 (I b類)

図3 近畿地方の弥生時代前期水田

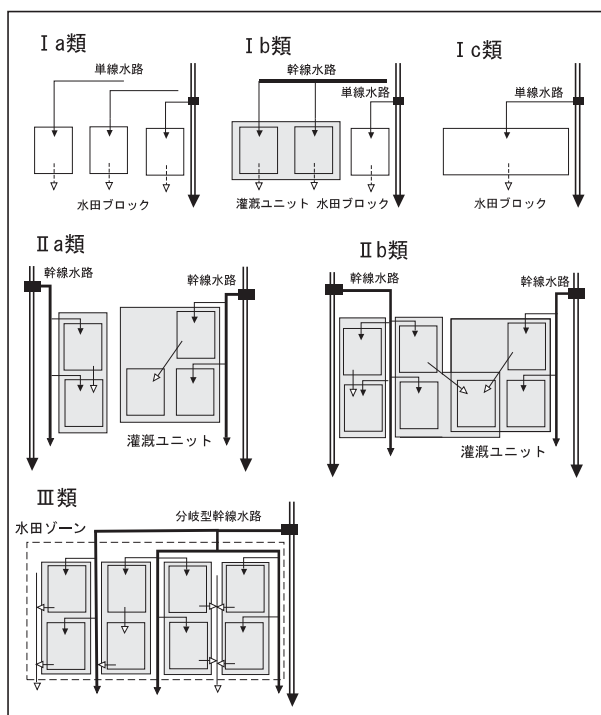
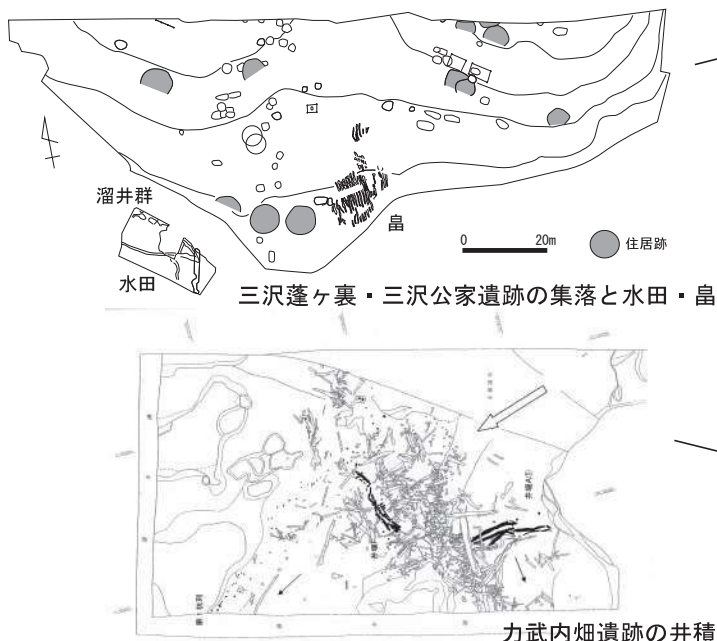
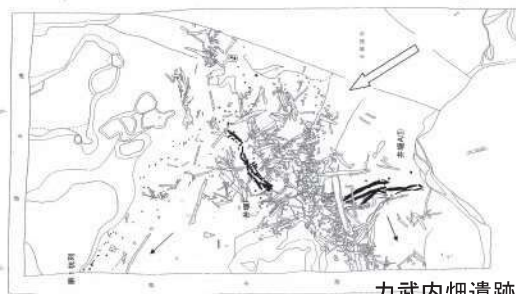


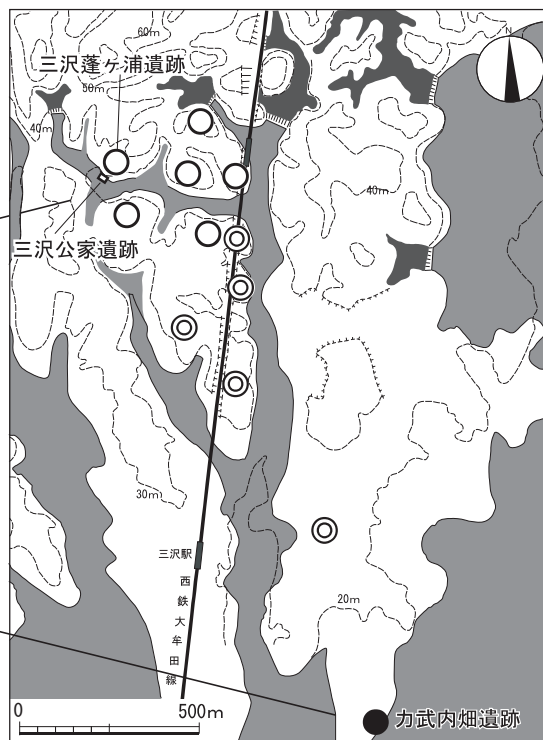
図2 弥生時代の水田構成



三沢蓬ヶ裏・三沢公家遺跡の集落と水田・畠



力武内畑遺跡の井積



- 前期前葉 (板付 I 式期)
- ◎ 前期中～後葉 (板付 II a・b 式期)
- 前期末～中期初頭 (板付 II c～城ノ越式期)
- 沖積低地
- 溜池

図4 福岡県三沢遺跡群の弥生時代前期の集落と農耕地

る。

平野が少なく稲作の比重が低い慶尚道地域の代表的な青銅器時代水田として蔚山玉峴無居洞遺跡の事例を挙げることができる(図7)。谷底低地に面した丘陵末端で湧水を水源としたIa類に相当する小規模な水田である。三国時代になると丘陵末端に水路を通して谷底低地を流れる流路を水源として水田域を拡大させている。青銅器時代にはこうした技術を導入せず、畠作など他の生業を合わせて行うことが選択されたようである。

また、平野が広く稲作の比率が比較的高い忠清道地域の代表的な青銅器時代水田として扶餘九鳳里・蘆花里遺跡の事例を挙げることができる(図8)。丘陵の先端で谷底低地を流れる小河川を水源とし、幹線水路によって水田域を拡大させた事例で、西日本の弥生時代中期に主体となるII類に相当する。同じ地域でも独立低丘陵上に集落が立地する論山麻田里遺跡の青銅器時代水田は、丘陵末端の湧水を利用したもので、水田域の拡大は難しく、地域内でも遺跡の立地やそこで得られる水源の違いによって、水田稲作への依存度は異なっていたことが予想される。

最後に畠作を生業の主体とする事例として慶尚道地域の内陸部にある晋州平居洞遺跡を挙げる(図9)。南江に沿った河辺沖積地の微高地上で大規模な集落と畠が、丘陵末端の後背湿地で水田が検出されており、夏作物のイネ・キビやアズキ・エンドウといったマメ類、冬作物のオオムギ・コムギが出土しており、大規模な畠では季節による輪作体系が一定程度成立していたと考えられる。水田は丘陵側の谷底低地を流れる小河川を水源にしたとみられるが、後背湿地に沿って細長くのびる水田域に水路が存在しないことから、周辺から流入する雨水や地下水への依存度も高かったと考えられ、畠作への比重が高いため、同時に行われた水田稲作は天水にも頼る水利に手間をかけない技術が採用されたのであろう。こうした、水田稲作と畠作の技術は日本の弥生時代には確認できない。

農耕空間の多様性の歴史にアプローチするためには、自然環境の違いとこれに働きかけた人間側の「駆動要因」についても細かく検討していく必要がある。

【引用文献】

大庭重信 2022 『弥生・古墳時代の農耕と集団構造』、同成社

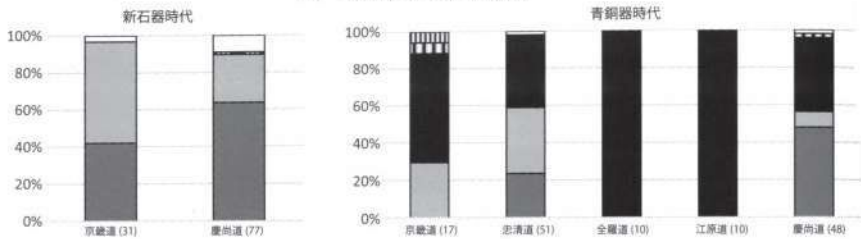
後藤直 2004 『東アジア先史時代における生業の地域間比較研究』、東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室

長友朋子 2022 「韓半島における穀物の受容と竈・甗からみた地域差」2022年度国際交流展『古墳時代の「台所革命」と東アジア～味なる“ごはん”の考古学』、西都原考古博物館

宮下直・西廣淳 2019 『人と生態系のダイナミクス 1. 農地・草地の歴史と未来』、朝倉書店

金萬亨 1991 『韓国の河川地形』、古今書院

(1) 土器圧痕からみた植物利用



(2) 種実からみた植物利用

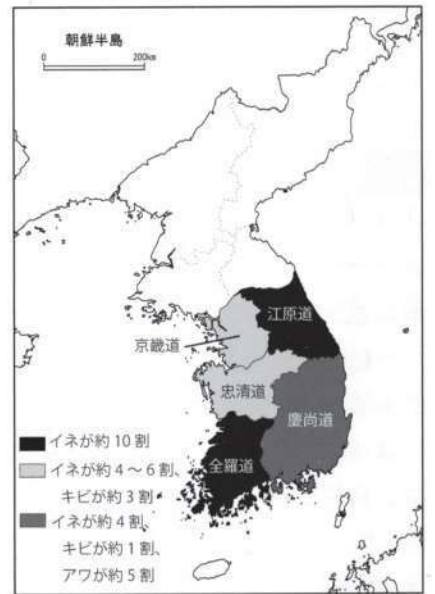
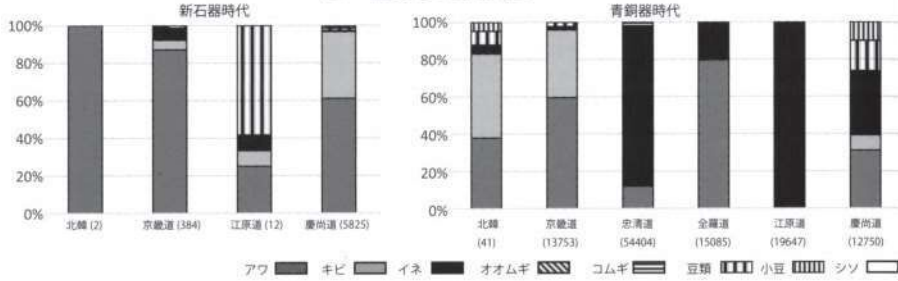


図5 韓半島の新石器・青銅器時代栽培作物 (図5・6 長友 2022) 図6 土器圧痕からみた穀物の地域性

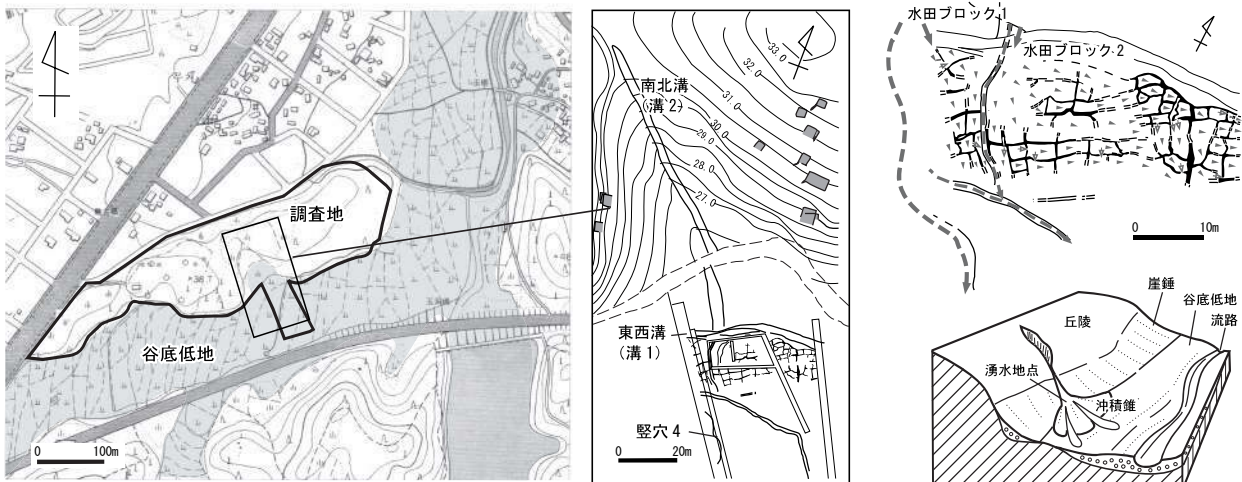


図7 蔚山玉峴無去洞遺跡の青銅器時代水田 (I a 類)

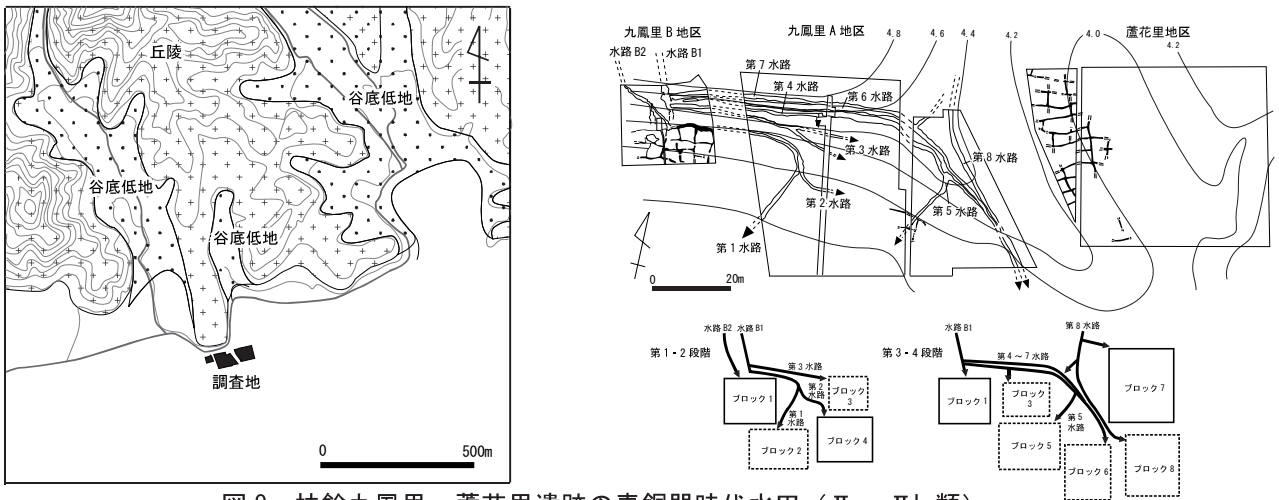


図8 扶餘九鳳里・蘆花里遺跡の青銅器時代水田 (II a・II b 類)

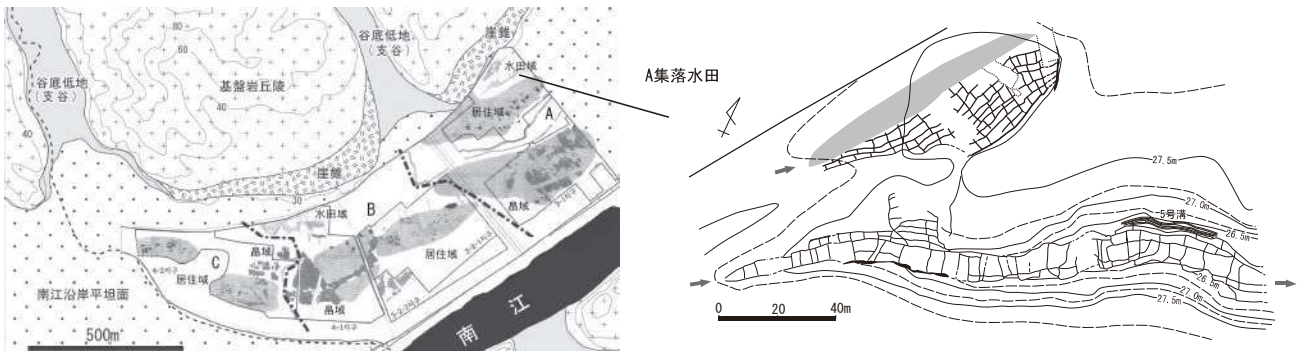


図9 晋州平居洞遺跡の青銅器時代水田